

緑小 学校だより

あいさつ、礼儀を「心の学校・緑小」の伝統に

校長 東峰 秀樹

「先生、あの時にあいさつや礼儀をしっかり身に付けてもらって、本当によかったなって、思うんです。」

もう30歳になるという教え子と再会し、お酒を酌み交わしながら、昔話に花を咲かせたのは昨年末のこと。彼は現在苫小牧市内の建築会社に勤務しているそうで、社会人となり、あいさつや礼儀が大切な生きる力の一つになっていることを実感していると笑顔で話してくれました。

担任時代は、いつも口酸っぱく伝え、指導も厳しかったのではと思っておりませんでしたので、こんな思いをもってくださっていることに、そしてその力を発揮しながら、生き生きと自らの人生を歩んでいることに心から、嬉しくなりました。

あいさつは豊かなコミュニケーションと良好な人間関係を築くために、また礼儀は人を思い慈しむ心と信頼関係を育むうえで、必要不可欠なものと考えます。私たちは、多様な他者とかかわりをもちながら、家庭生活・社会生活を営んでいきます。それらが円滑に潤いのあるものとなる、その潤滑油の働きをするのが、あいさつであり、礼儀なのです。

気持ちのよいあいさつを交わしたとき、また礼儀正しい行動に触れたとき…まるで心に魔法をかけられたような温かく幸せな思いに満たされます。

ここで、一つのエピソードを紹介いたします。もう何年も前になりますが、公共広告機構のAC ジャパンが創立40周年を記念して実施した「作文コンクール」で最優秀賞を受賞した作品です。CMにもなったので記憶にある方もいらっしゃるかもしれません。

…私は仕事の帰り道、長時間の運転で疲れていた。町名も知らない、ある町の押しボタン式の信号が「赤」になり、停車した。間が悪いなと思いながら、不機嫌に舌打ちした。私の車は前から三台目で、最初誰が止めて渡っているのか、わからなかった。

横断歩道の半分ほど過ぎて、子どもが急ぎ足で渡っているのが見えた。年・恰好は、小学校の2、3年生ぐらいだろうか。私はいら立つ目つきで見ている。

次の瞬間、私は驚いて目を見はってしまった。お辞儀をしたのだ。その少年は、横断歩道を渡りきると、振り向いて、停まっている左右の車に向かって腰を曲げて丁寧に「お辞儀をしてくれました。ありがとうございます。」という少年の気持ちが伝わってくる仕草だった。

信号が「青」になり、対向車の人の顔が見えた。誰もが、にこやかに笑っていた。私の疲れていらした気持ちも、魔法にかかったように、晴れ晴れとした何とも清々しいものに変わっていた…

緑小の子どもたちには、あいさつで人の心を明るくさせる「魔法使い」になってほしいと願っています。すでに、「魔法使い」としての力を発揮しつつある、あいさつが素晴らしい子も見られます。まずは自分から進んで、元気に笑顔であいさつができる、その力をしっかりと子どもたちに付けたいと考えます。『心の学校の心のあいさつ』が緑小の伝統として、根付き、その質を高めながら受け継がれていく…新たな歴史のはじまりを目の前の子どもたちと一緒に刻んでいきたい、そう強く思っています。